

学会見解

「アレルギー免疫療法」の基本的考え方

アレルギー免疫療法とは、アレルギー疾患の病因アレルギーを投与していくことにより、アレルギーに次に曝露された場合に引き起こされる関連症状を緩和する治療法で、IgE 依存性のアレルギーの診断が正確になされている患者が対象となる。

アレルギー免疫療法は、アレルギー回避指導とともに行えば疾患の自然経過を改善できる点で、対症療法である通常の薬物とは明確に異なる意義を有している。すなわち、一定の十分な期間にわたり正確にこの治療を行った場合には、効果が長期間持続し、薬物の使用量を減らすことができる。ダニ・アレルギー患者に本療法を行った場合、個々の患者の新規アレルギーに対する感作が抑制されることが報告されている。またアレルギー性鼻炎患者に本療法を行った場合、その後の喘息発症頻度が抑制されることも報告されている。この治療を行なう医師は、皮膚テストなどを用いて病因アレルギーを正確に同定し、その正しい回避指導を行うことができることが必要である。

アレルギー免疫療法の対象疾患としては、花粉症、アレルギー性鼻炎、気管支喘息、ハチ毒アレルギーが現時点では一般的である。さらに現在、食物アレルギーに関しては新しい形の免疫療法の臨床研究が進行中である。今後は、食物アレルギーも含め一部のアトピー性皮膚炎、蕁麻疹、薬剤アレルギーなどにも免疫療法の適応が拡大していく可能性がある。

方法として、注射による皮下免疫療法 (subcutaneous immunotherapy, SCIT) が標準的である。代替法として、舌下免疫療法 (sublingual immunotherapy, SLIT) が導入される予定である。国際的に、アレルギー免疫療法はいずれの方法においても、アレルギー診療の修練を十分に積んで精通した医師が行うべきものとされている。アレルギー免疫療法を行なう医師は、この治療の対象と意義、正確な施行方法等についての十分な知識を持つ必要があり、病因アレルギーの診断を正しく行ない、副反応に注意しながら長期の治療が必要となることを患者に説明し、患者の理解と同意を得た上で適切に施行することが望ましい。

2013年4月 日本アレルギー学会
同 アレルギーと免疫療法専門部会